

「阿波の狂歌師」 遠藤春足文書の発掘と調査概要

狂歌文書館 立石 恵嗣

1、はじめに 遠藤宇治右衛門（春足）について



【肖像画（阿波藩御用絵師・渡辺広輝筆）】

遠藤宇治右衛門 天明二年・一七八二〜天保五年・一八三四。
阿波国石井村（現徳島県名西郡石井町石井）の人。

遠藤宇治右衛門【狂号・春足（はるたる・はるたり）】は、江戸時代後期、阿波の特産品である「藍玉」（藍染料）の「売場株」（販売権）を持ち、江戸八丁堀と八王子に出店を構えて活躍した阿波の藍商人である。

家伝によると、家祖は遠藤安芸守利包（としかね）と称し、戦国期に美濃から阿波に入国して石井村に居を構えた。代々宇治右衛門を名乗り、阿波で隆盛した藍業に従事して財をなし、近世初期寛文年間には江戸への進出を果たした。藩内では有力とされる「関東売藍商」三十六軒の一家に数えられる。

五代目となる宇治右衛門・春足は、十歳の時両親を相次いで亡くし、祖父治兵衛の後見のもと藍業に従事して成長し、寛政十二年には献金により士分格の「郡代付浪人」となった。家業の商売で阿波から江戸にしばしば通う中で爛熟期にあった文化文政時代の町人文化に多大な影響を受けるに至り、生来の文学的嗜

好や向学心と恵まれた才能が、豪商としての潤沢な経済力を背景にして開花した。

文化的活動は文学・国学など多方面にわたるが、特に狂歌では石川雅望（宿屋飯盛）に師事し「五側」（六樹園派）の実力者として頭角をあらわし、阿波淡路を拠点とした狂歌界の中心人物として名をなした。また早くから本居宣長の国学に関心を持ち、宣長の後継者本居大平に入門して、多くの国学者や文人墨客との交流を重ねて研鑽に励んだ。

蜀山人、亀田鵬斎など多彩な文化人との交流も積極的に行い、手紙のやりとりによって直筆の書簡や揮毫された書軸、収集した絵画など、文学・浮世絵・歌舞伎など「化政文化」を代表する多様な文化的資料が多数残されている。自作の出版にも意欲的で、『白痴物語（しれものがたり）』（文政十一年）、『猿蟹物語』（天保元年）などを刊行した。

この度、遠藤家から保管されている全文書の公開と調査を依頼される機会を得た。四国大学や徳島県立文書館をはじめ、多くの研究者方々のご協力により調査研究の端緒についたばかりではあるが、現在までの調査概要を報告したい。

2、先行研究の成果と課題

江戸時代阿波と淡路を領有した蜂須賀藩は、二十五万七千石の大藩であった。特に吉野川流域に隆盛した藍産業を奨励保護した。十八世紀に入ると日本屈指の藍作地帯に成長し、専売制度

を作り上げて藩庫を潤した。吉野川流域の豪農は積極的に藍作（葉藍栽培）と藍玉（藍染料）生産に取り組み産業経済的にも繁栄した。藍商人たちは藍玉を販売するため全国に雄飛して商売活動に務めた。その豪勢な経済力と豪遊は、「藍大尽」として知られた。

江戸時代後期に開花した江戸の町人文化（化政文化）は、このころ全国に勃興してきた藍業にみられるような各地の地場産業のいない手である豪農豪商たちによって、地方に伝播された。彼らは「化政文化のパトロン」ともなつて地方文化の繁栄の一翼になつたといえるのではないか。

遠藤宇治右衛門家は、江戸時代初期の寛文年間から関東売藍商として江戸と武蔵に売場を持つ有力な藍商人であった。春足の文化活動は、豊かな経済力をもつ藍商人のひとつの側面と言えるだろう。

阿波藍業の経済史的研究に関しては幾多の蓄積がある。（『阿波藍沿革史』西野嘉右衛門、『阿波藍譜』三木與吉郎など）しかし文化史的観点からの研究実績は少ない。この意味において春足の収集した歴史資料は、地方から「化政文化」を照らし出すひとつの断面であり、江戸町人文化の地方史的考察の貴重な研究素材となるものであろう。

（残念ながら幕末維新期に藍業から撤退したため遠藤家には藍業に関する経営資料は廃棄されほとんど残されていない。このため藍商遠藤宇治右衛門の経済・経営史的からの研究はこれか

らの課題として残されている。」

ところで遠藤宇治右衛門・春足は、江戸後期の阿波淡路の狂歌界の大御所的存在として戦前より徳島の郷土史界では知られた存在であった。文学的観点を中心とした研究成果には次のようなものがある。

(1) 鈴木 馨(中京大学教授) 「難後言(なんしりうご)の著者遠藤」一九五八(「国語国文」第二十七卷第十号)、「阿波の狂歌師遠藤春足」昭和十二年『渭水』終刊号、「遠藤春足年譜(未定稿)」。

※阿波の狂歌師春足の国文学史的研究。宿屋飯盛に師事した春足の化政期における狂歌を中心とした文芸活動を春足文書の著作・書簡などにより論証している。

(2) 粕谷宏紀(日本大学教授)『石川雅望研究』一九八五 角川書店

※春足の師石川雅望との交流が書簡の分析により論証。

(3) 藤井喬(徳島文理大学教授)「狂歌師遠藤春足」昭和六十二年『徳島先賢伝』所収

※郷土史的文学史的視点からの論証。

(4) 石川俊一郎(慶応義塾高校教諭)

「遠藤春足と『白痴物語』」一九九一 日本近世文学会口頭発表。

(5) 『石井町史』下巻 一九九一

※芸能の章文芸の項において狂歌師遠藤春足を紹介している。

(6) 後藤捷一(染色史家) 『天半藍色』三木文庫所収

※藍商の文化活動として写真により紹介。なお四国大学「凌霄(りようしやう)文庫」(後藤の収集文庫)には刊本『猿蟹物語』『白痴物語』などを紹介。

(7) 泉 康弘『阿波の豪商―経営戦略と盛衰―』一九九一 徳島新聞社

※藍の豪商と狂歌師としての遠藤宇治右衛門を紹介。

(8) 真貝宣光『石井町史』上巻 一九九一

※関東売藍商としての遠藤宇次右衛門を近世の石井の項で紹介。

3、遠藤春足文書の調査経緯と方法

(1) 調査の経緯

遠藤春足が残した歴史資料が、直系の遠藤家(徳島県名西郡石井町石井)に残り保管されていることは一部の郷土史家や国文学研究者により知られていたが、その文書資料の全貌は明らかになっていなかった。

令和四年末、御当主の遠藤亘雄氏の死去を契機に、御遺族から保管されてきた歴史資料の調査依頼が石井町教育委員会と町文化財保護審議会委員の立石にあった。このため急遽有識者に協力を依頼し、令和五年一月に調査を開始した。調査者は須藤茂樹

四国大学教授（日本中世史・芸術史）、佐藤武元徳島文理中高校教諭（国文学）、立石恵嗣（元徳島県立文書館長（近代徳島産業史）で、所蔵者遠藤雅義氏と共に保存されている書・絵画・古文書・古道具などの発掘調査を開始した。

（2）調査方法

文書資料の総体的な内容を把握するため、調査とともに写真撮影してデジタルデータを取り、佐藤を中心に解説をはじめた。調査が進むにつれ、春足の収集した文書群は、江戸時代後期の宝暦・天明期および文化・文政期を代表する文化人に関わる多彩で貴重な歴史資料としての価値の高いものが満載されていることが分かってきた。このため将来的な保存と活用に加え、専門家による高精細な写真撮影が必要との判断に至った。幸い立石が研究員として所属する四国大学の「阿波藍文化」についての研究事業（SUBARU 事業）と提携することができた。一部ではあるが撮影資金が用意できたので専門業者による撮影に取りかかった。資料撮影に際しては便宜的に資料毎に、まとめと考えられるものにA・B・E・J・Kなどをつけ整理番号を付した。（最終的には原本に通し番号Ⅱ資料番号を付し、写真データ番号と解読文データともリンクしたデジタル文書目録を作成する予定である。）

（3）資料の概要

A 調査整理と写真撮影済み資料

※（A-1）（EII-2）・・・などは、写真用整理番号である

① 古文書冊子『手鑑』四点（EII01～EII04）

最初に春足自身が整理して張り込んだと思われる和式の冊子、遠藤家では「手鑑」と伝えられている四冊の折り本型アルバム（四四・五×三四・五センチ）から着手した。書簡・狂歌・浮世絵・短冊など多彩な文化的コレクションが満載され、化政文化期の象徴的作品が満載されている。現在、佐藤武氏により解説が行われ、後述のホームページ「狂歌文書館」に順次アップしている。（内容の詳細は解説を進める佐藤武氏の気づきやメモを参照のこと。）

② 遠藤春足肖像画（渡辺広輝筆）（EII-05）

春足の肖像画。作者は阿波藩の御用絵師渡辺広輝。柔和で温和人柄、文人としての知性や厳しさをそなえた裕福な藍商人の存在観をもつ見事な肖像画である。なお、春足の師である石川雅望とおもわれる北溪筆肖像画（J-6）も発見されている。

③ 表装された絵画（掛け軸）（A-1～A-64）

本居宣長・蜀山人・酒井抱一・谷文兆・鈴木芙蓉・宮川長春などの書画。

④ 額装された書画（A-65～A-75）

石川雅望、亀田鵬斎、菊池五山、皆川淇園、平田篤胤、式亭三馬、曲亭馬琴など。

⑤ 表装および未表装の書画類 (J-1~J-108) 一〇八ロマ

⑥ 遠藤家伝来の骨董品 (A-78~A-84)

⑦ 扇面に描かれた書画・短冊 (A-85~A-121)

⑧ 狂歌の短冊 1 春足作品 (B-91~B-690)

⑨ 狂歌の短冊 2 春足以外 (J-109~J-218)

⑩ 木版刷の狂歌番付表(「月並金石狂歌集」) (A-122~A-129)

⑪ 木版の狂歌五十三次 東海道中双六 (A-131)

⑫ 木版の広告・案内のチラシ(判者披露・狂歌会の摺物) (A-132~A-133)

B 未整理の資料群 (写真撮影・資料番号添付作業中)

【二階物置保管】

遠藤家に保管された資料群は、軸装の書画・額・書籍など主として五代目宇治右衛門春足によって収集されてきたものが主体

であるが、その後遠藤家で購入されたものが数多く二階物置に未整理のまま段ボール箱で十箱余残されていた。下調査によりこの中からは春足の『春屋随筆』『六々園漫録』など自筆稿本や書簡、刊本、石川雅望『雅言集覧』、本居大平などとの新発見の書簡、春足の実弟で画人であった翠雅(昂美)の画帳など貴重な文書資料が含まれていることも判明した。

徳島県立文書館と整理法について相談したところ、高い文化的史料価値であるとの判断から文書の燻蒸と整理作業を引き受けていただくことになった。現在、文書館において燻蒸を済ませ文書整理と撮影、文書目録の作成を作業中である。

⑬ 春足作の木版刊本『白痴物語』『猿蟹物語』『吾嬬日記』など) (E-1~E-7)

⑭ 春足の自筆稿本(「六々園漫録」「春屋随筆」など)

⑮ 春足はじめ遠藤家収集の和書・漢籍の刊本や写本および書簡類

吉原十二時・狂歌阿淡百人一首・日本永代蔵・好色一代男、論語集註大全・孟子・十八史略・雅言集覧・北斎漫画・直毘靈など

4、調査の成果と課題

最後に、これまでの調査から明らかになりつつあるものと、こ

れからの課題をまとめておきたい。

(1) 春足文書を通して江戸に展開した「化政文化」の実相と一断面。

(2) 藍商人など地方の豪農豪商との交流を通じた江戸文化の地方への波及・伝播の実相。

(3) 藍業の発達による阿波藍商人の文化活動の実相。など

江戸時代後期の文化・文政期、江戸を中心に花開いた町人文化の背景には地方における産業の発達があつた。大坂や江戸との経済的交流を通して、江戸文化そのものが地方への波及・伝播していったこと。江戸後期における藍などの地方産業の発達と隆盛との中で成長した豪農豪による江戸との経済交流や文化交流が「化政文化」の時代背景にあつたといえるだろう。阿波の藍商として潤沢な経済力を持った遠藤宇治右衛門はその担い手の代表的存在として捉えることが出来るだろう。

従来、藍業の発達にともなう阿波の隆盛とその担い手としての藍商の存在が推測されていたが、春足文書の発見によりその内実が明らかになった。

徳島の地方史にとつてばかりでなく、文化文政期を中心とした江戸文化の文学的・文化史的意義を知る上においても重要な歴史資料といえるのではないだろうか。「化政文化」の実相や時代背景を地方からの照射として期待できるのではないかと考える。

5、おわりに ホームページ「狂歌文書館」の作成と情報公開

遠藤春足研究の学びの輪を広げ、同志を募り、研究の深化を図るためあらたな試みとして、これまでの調査結果をSNSでホームページを作成して情報公開する試みをはじめた。『狂歌文書館』と名づけ、管理者は文書所有者遠藤雅義氏で、≡ 作成を担当、佐藤武氏の解説と解説をもとにした有志グループの研究調査の成果を情報発信するという試みである。完成版でなく未完成のまま公開し、ご意見をいただきながら仕上げていくというスタイルを取りたい。阿波の藍商で狂歌師・遠藤春足の認識を広め、江戸時代の阿波における文化活動の真相の解明と研究の深化を図ることが目的である。研究者を問わず「狂歌」に興味や関心がある方々のご参加とご協力をお願いする次第である。

2024・6・1